Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「懐徳」の復刊をきいて |
| Author(s) | 竹内, 義雄 |
| Citation | 懐徳. 1951, 22, p. 78-78 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/90246 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 「懷德」の復刊をきいて

武内義雄

近ごろ木村教授の御手紙によつて堂友會雜誌「懷德」が復刊されることに成つたことを知り心からうれしく思つた。大正五年懷德堂が重建せられた後七年、聽講生諸君の發起によつて堂友會が組織せられ、十二年十一月四日堂の恒祭の日を卜して發會式が行はれた。當時私は仙臺に移つてゐたためこれに臨むことはできなかつたが、その月の廿八日東京からいただいた西村先生のお手紙に「堂友會は懷德堂の成果とも云ふべし、發會式に參り十年來の辛苦を慰め不覺落涙致候老境可笑耳」とあつた。堂の重建にさゝげられた先生の苦辛を目擊してきた私は先生の御心持を想像してまた涙をさそはれたことを今更のやうに思ひうかべる。會の趣意書に

懷德堂開講以來茲に七年、其の間聖賢の敎を聽きて之を喜ぶもの蓋し數百人、想ふに吾人と道を共にし樂を同うするもの亦尠少なからざるべし。然れども每講時を計りて經筵に列し、講終りて直ちに解散するを以て、同人盍簪して相語り胥樂むの機會なきを惜む。是を以て吾人自ら揣らず堂友會を起して、此缺陷を補ひ、以て相互の親睦を厚うせんと欲す。云々



とあつて、聖賢の道を樂しむ堂友が相合して相互の親睦を計らうとすることは、正しく懷德堂重建の成果をもたらしたもので、先生が落涙して悅ばれたこともさこそと想ひやられる。さうして當初の會則中に「每年一回會報を發行し堂の狀況、會員の寄稿、幷に會員の動靜を揭載す」とある會報が卽ち雜誌「懷德」であつて、「懷德」はその後引つゞき發刊されて、時々は狩野・內藤諸先生の論說も揭載せられ、堂友諸兄の勞作も載錄せられて、單に堂の狀況と會員の動靜を報ずるだけでなく、學問的にも價値の高いよい雜誌であつた。但西村先生は十三年六月易簀せられたので之を御覽に入れることができなかつたが、必ずや在天の靈は我が願は達候と御悅であつたらうと思ふ。

ところでかうした立派な「懷德」も永くはつゞかず、不幸な戰火のために堂はやかれ、堂友は四散して、その消息をさへ知られなく成つて了つた。如何に成りゆくことかと心配したが、幸に理事者諸賢の熱誠と阪大文學部諸先生の好意とによつて、春秋二回の講習が開かれることになり、今又堂友會誌の復刊を見るに至つたことは此上もなく喜ばしいことである。願くはこれによつて再び同志が叫合せられ懷德堂先儒の遺音がつがれる樣な企劃がつぎつぎに實現されることを切望する。